

# 特別展「きのくにの小浪華－湯浅ゆかりの文人の書画－」 展示の見どころ

菊池海莊像 九鬼虚白作 湯浅町教育委員会蔵 【資料番号 19】

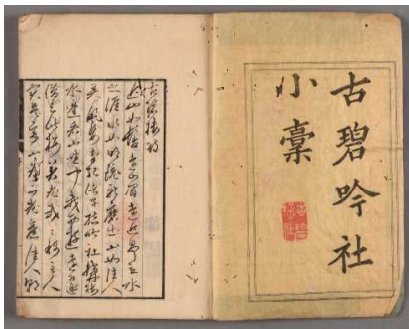


幕末維新期の日本を代表する漢詩人の一人、菊池海莊（1799～1881）は栖原村の名族・垣内氏（後に菊池氏に改姓）の生まれ。江戸で砂糖問屋を営む傍ら、様々な文人と交遊しました。栖原の屋敷に各地の文人を招いたり、漢詩サークルの古碧吟社を率いるなど、湯浅における文芸活動の中心的人物でした。

この作品は、明治8年（1875）、海莊が78歳のときに、伊都郡隅田村（現在の橋本市隅田町）出身の彫刻家・九鬼虚白（生没年未詳）によりつくられたものです。附属する箱に記された、海莊自筆の文章によると、普段の自身の姿そのままだと、絶賛しています。

特別展では、海莊と交流があった人々の作品を多数展示します。

古碧吟社小稿 松原永年編 湯浅町教育委員会蔵 【資料番号 21】



古碧吟社は、菊池海莊が事実上のリーダーとなり、湯浅で活動した漢詩サークルです。

湯浅のまちの南側の入り江にあった、美しい松並木と海辺の景色を誇る酒樓を、古碧樓と呼び、そこを拠点としていました。この資料は、古碧吟社の活動時に、唯一出版された詩集です。同人16人の漢詩が、収録されています。その詩の内容から、優雅な集いの様子がうかがえます。他にも、古碧吟社に関する資料をご紹介します。

山水図襖 平林無方筆 福蔵寺蔵 【資料番号 38】



漢詩だけでなく、菩提寺の深専寺（湯浅町湯浅）に作品がのこる馬上清江（？～1842？）など、湯浅では絵を嗜む者もいました。福蔵寺の住職であった瑞空（1782～1837）は、和歌山県を代表する文人画家・野呂介石（1747～1828）に絵を学んで、平林無方と名乗った画家でした。この襖には、作者の情報を伝える落款はありませんが、作風から無方が描いたものと推定されています。見応えのある大作の山水図は、介石の弟子の作品としては珍しく、注目されます。